



Title	野田村と海とのつながり : 野田村の海文化の意味と 存続
Author(s)	Yang, Luke; Shangguan, Shicong; 中村, 早希
Citation	未来共創. 2026, 13, p. 215-230
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106433
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

野田村と海とのつながり — 野田村の海文化の意味と存続

Yang Luke (大阪大学人間科学研究科)

Shangguan Shicong (大阪大学人間科学研究科)

中村 早希* (大阪大学人間科学研究科)

1. はじめに

筆者らは大阪大学大学院人間科学研究科にて開講された「コミュニティ・ラーニング特定演習」の授業の一環として、東日本大震災の被災地の一つである野田村の沿岸地域を担当し、その活性化をテーマにフィールドワークを実施した。

野田村における水産養殖業および販売業の変化が、村全体の漁業に対する意識や生活のあり方にどのような影響を与えているかを明らかにするために、野田漁港、玉川漁港および旧商店街周辺で2025年8月18日から8月20日までの3日間野田村の人々を訪ねた。

本報告では、第2章で調査概要について説明したのち、第3章でインタビュー内容の考察を行う。調査の結果、東日本大震災や地球温暖化によって漁業環境が大きく変化する中でも、村の漁業者や住民の間では、海を生活の基盤として受け入れ、共に生きようとする姿勢が根強く見られた。一方で、若年層の漁業離れや地域行事の縮小など、海との関わりの希薄化も進行していることが明らかになったことについて述べる。

* ; u426796d@ecs.osaka-u.ac.jp

このように、野田村では「海と共に生きる伝統的な価値観」と「変化する社会環境への適応」が併存しており、今後の課題として、海文化の継承と地域アイデンティティの維持が挙げられる。そしてこれらの分析を踏まえて、第4章では提案として、地域イベント再生による海文化の継承、海の実相に関する情報発信の強化、防潮堤をめぐる村民主体の合意形成プロセスの構築、という3点を提示する。

2. 調査概要

2.1 フィールドの紹介

野田村は岩手県沿岸北部に位置し、東方に野田湾を望む。村の北側には十府ヶ浦に代表される砂浜が広がり、南側にはリアス式海岸が展開する。また、西部は北上山系が連なる自然豊かな地域である。当地域では、養殖業、定置網業、漁船漁業、採介藻漁業が営まれており、主な生産物は、ホタテガイ、ワカメ、サケ、ウニ、アワビなどがある。特産品である「岩手野田村荒海ホタテ」が地理的表示(GI)保護制度に登録され、農林水産省が地域の知的財産として保護しており、地域資源としての価値が高まっている。2011年3月11日に発生した東日本大震災および津波により、野田村の漁船や水産関連施設は甚大な被害を受けたが、2015年3月までに復旧整備は概ね完了している。

他方で、被災船舶や漁業用資機材の復旧費用に加え、原油価格の高騰に伴う漁業用燃料や資材、ワカメ加工作業などの経費の増加が漁業経営を圧迫している。さらに、不漁による漁獲量の減少や担い手不足の問題など、当地域の水産業を取り巻く環境は依然として厳しい。養殖の主力であるホタテガイ生産量は、震災後、徐々に回復し、2018年度には震災前と同程度まで回復した。野田湾は外洋に向けて大きく開けた湾で潮流が速く波当たりが強いことから、かつては貝類養殖には不向きとされてきたが、当地の漁業者は長年の試行錯誤の末、カゴによる養殖方法を確立している。漁業の主要な拠点は野田漁港である。関係主体としては、役場および漁業協同組合に加え、漁業者並びに水産販売従事者が挙げられる。漁業権の管轄に関しては、漁協関係者の南川雄彦さんへの聞き取りによれば、「昭和40年前後、野田地区と玉川地区の漁協が合併して「野田村漁協」が設立、両地区の漁業権を管理している」という。以上の基本情報および漁協組織の変遷を踏まえ、本調査では野田漁港を主たる観察拠点とし、その

周辺の鮮魚販売所、並びに玉川漁港等にも補足的に踏査を行った。

2.2 調査方法

著者らは、沿岸地域の担当として、2025年8月18日早朝の市場見学からフィールドワークを開始した。初回のインタビューは役場産業振興課の中野雅章さんに対して実施し、その後調査を拡大して、行政・漁協・漁業者・水産販売従事者を含む9名にインタビュー調査を行った。併せて、小林魚店の小林寛さんの協力のもとで市場におけるセリの同行観察を行い、まち歩きおよび海水プールの施設観察を実施した。

表1 フィールドワークのスケジュール

日程	時間	場所	内容
18日	午前	野田漁港	市場見学
		野田村役場	水産担当の中野雅章さんにインタビュー
	午後	小林魚店	販売主の小林寛さんにインタビュー
		小野商店	販売主の小野さんご夫妻にインタビュー
19日	午前	野田漁港	小林寛さんと市場でセリ見学 漁師の仲居勉さん・中川綾人さんにインタビュー
		野田村漁業協同組合	組合員の南川雄彦さんにインタビュー
	午後	生涯学習センター	インタビューの文字起こし・内容整理
		野田漁港	漁協組合長・漁師の小谷地勝さんにインタビュー 若手漁師の中川静規さんを紹介していただく
20日	午前	生涯学習センター	発表資料作り
	午後	生涯学習センター	発表資料作り
		野田村海水プール	海水プール見学
		玉川漁港	漁師の中川静規さんにインタビュー



図1 販売主の小林さんと市場見学(2025年8月筆者ら撮影)

3. インタビュー内容と分析

3.1 産業の変化

野田村の漁業は、貝毒問題の長期化、定置網漁における漁獲量の減少と、高齢化や後継者不足という3つの現象が重層的に作用し、産業構造や生業実践に顕著な変容をもたらしていることが、インタビューから明らかになった。貝毒とは、貝が毒を持ったプランクトンを捕食し体内に毒を蓄積させてしまう現象である。

3.1.1 貝毒の影響

近年、海水温上昇等の環境変化を背景として、野田村の象徴的な資源である荒海ホタテの養殖は、貝毒に伴う出荷自主規制を余儀なくされている。出荷の再開には3週間連続で貝毒が基準値を下回る必要がある。県漁連の週次検査(「ほたてがい貝毒検査結果」)によれば、国の規制値を超過した場合には流通が不可となるため、該当海域の二枚貝等は出荷停止措置が講じられる。この規制の影響は、現場の語りに端的に表れる。役場産業振興課の中野雅章さんは、「(ホタ

テ養殖に従事する漁師さんは)三年近く収入がないけど、管理を続けなければならないので、経費やコストがかかり続けている」と現状を述べる。行政としては貝毒検査料の支援金を措置するとともに、「カキやムール貝など新しい品種への挑戦を支援していく方向」を模索しているという。

一方、漁協の南川雄彦さんは、「日常の貝毒検査を続けながら現実的に対応していく」「貝毒というのは自然に起こることだ」と受け止める。研究機関と連携した対策はあるのかについて問うと、南川さんは、「貝毒について、大阪で研究があるらしいが、野田村の海にも適用できるかは分からず、それを明らかにするには十数年かかるだろう」と話し、他地域や研究との連携に過度な期待はできない、ということをお話された。養殖品種の転換については、漁協組合長でホタテ漁師でもある小谷地勝さんは、「養殖する品種を変えれば解決するという話ではない」と話す。カキやムール貝はホタテ以上に貝毒数値の変動が激しく、出荷の不確実性がむしろ増すためである。これらのインタビューから、「貝毒の問題は単純ではない」という現状がうかがえる。貝毒によりホタテの収入がなかった時の家計対応については、若手漁師の中川静規さんが、「共済組合の掛け金」や、「ワカメ養殖など別の仕事」を組み合わせで生計を立てていたと語る。

以上の聞き取りから、貝毒問題に対応するように、行政の費用支援、漁協の協力管理、漁業者の複業化がそれぞれの水準での現実的対処として作動していることがわかる。他方、他研究機関の成果を短期間で地域に適用することには時間的・技術的な制約が大きく、貝毒は未だに解決が難しい課題である。

3.1.2 漁獲量の減少

2025年8月18日早朝、市場を訪れると、定置網漁の水揚げは大漁のように思われ、活気すら感じられた。ところが、その場で漁師から聞き取ると、この日の水揚げは2から3トン程度に過ぎず、「ものすごく少ない」ということだった。かつては100トン近くを取れた時期もあり、最盛期は昭和40年代から50年代だったという。また、役場の中野さんへのインタビューによると、村の公式マスコット「のんちゃん」が象徴する鮭は、昭和時代に最も水揚げが盛んだったが、現在の野田沿岸では激減してしまったそうだ。市場を訪れた翌日の2025年8月19日、魚屋の小林寛さんと再び市場でセリを見学したが、当日は定置網漁の水揚げがなかった。入網量が少ないためガソリン代と採算が合わず、隔日の水揚

げにせざるを得ないという状況である。ホタテ養殖が出荷停止等で厳しい局面にあるのと並行して、定置網漁も漁獲量減少に直面している。このような背景を踏まえ、地元で鮮魚販売を担ってきた小野商店の小野建男ご夫妻は、鮮魚販売からの撤退を余儀なくされたと語った。

3.1.3 高齢化と人手不足

産業面の制約に加え、人手不足と高齢化は構造的課題として浮上する。2025年8月19日、野田漁港で仲居勉さんと中川綾人さんに話を伺った際、定置網漁師の約3分の2は30から40代で、相対的には若手が多いという。他方で、南川さんは組合員の推移について、「現在の漁協組合の組合員は111名いる。震災前は200名以上いたが、震災以降に毎年10人ずつぐらい減少している」と語る。退会理由は主として「高齢」であることと「息子、娘が継がないから」であるという。中野さんも、「次を継ぐ人がいない。『価値観（が変化した）』のせいかな」との見解を示した。後継世代の声として、25歳のホタテ養殖漁師の中川静規さんは次のように述べる。

知り合いの7割はほぼ県外に行った。残った3割も久慈だったり……将来的に見たらこの漁港を使うのは自分一人になってしまう。手伝いがいたら続けられるかもしれないけど。……続けようとは思うけど、続けられるような状況にあればいいというのが正直な感想。

賃金の不安定さと作業の「寂しさ」は将来への不安と結びつき、来年の転職を検討しているとも語られた。以上の聞き取りを総合すると、若手の一定割合は残存するものの、全体としては高齢化と後継者不足により組織規模が自然に縮小しており、作業の人員確保が継続的な課題となっている。

3.2 海の生業をめぐる人間関係と活動

3.2.1 取引関係に基づく人間関係

野田村では海に関わる生業をめぐる、長年にわたって、組織関係や取引関係、さらに人間関係のネットワークが形成されている。野田村では、まず漁協が海面漁業権を管理し、個々の漁師がそれを行使する仕組みが存在している。中川さんは、家族が玉川地区でワカメやホタテ養殖・定置網漁に従事しており、

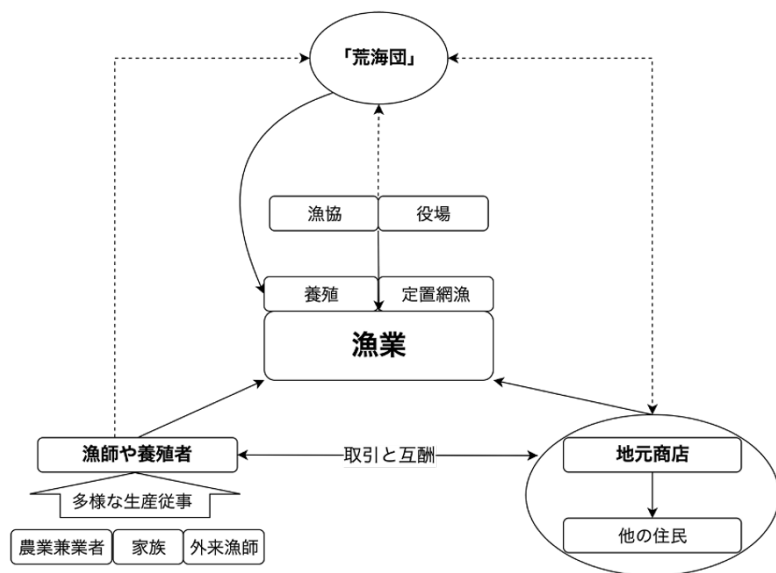


図2 漁業をめぐる人間関係（筆者ら作成）

その影響で「気付いたら漁師になっていた」という。また、主業は農業でありながら朝に漁業を手伝う若者もあり、さらに仲居さんのように生計を立てるために洋野町から野田に來た漁師もいる。よって、野田村の水産業は、家族的継承や兼業的従事、地域外からの流入といった、多様な人間関係の上に成立していると考えられる。

生産から取引の側面に目を向けると、市場では漁師と買い手の取引が日常的に展開されている。2025年8月19日の朝、野田港の市場では、エプロンをつけた漁師たちが水槽前で伝票を記入し、買い手が魚を確認しながら秤で計量し、トラックに積み込む様子が見られた。そこで著者らが出会った買い付け業者は、長年契約を結んでいる普代村三陸水産、久慈市宇部町川崎商店、越戸商店の三社である。このことから、取引による人間関係は、野田村周辺の地域まで広がっていることがわかった。そして、村外の業者だけでなく、地元には長い歴史を持つ魚屋も存在する。小林魚店は「父の代から続いている店」で、「店は震災で流されたが、場所を移して再開した」そうで、さらに「二階では甥っ子がランチ営業をしている」と語られた。小野商店も昭和の時代から夫婦で40年以上続け

てきた。こうした地域の魚屋は、長年にわたり地域社会に根を下ろしてきた存在である。さらに小野商店では、漁師からお中元として魚や貝をもらい、その返礼として菓子やジュースを贈るというやり取りが語られた。また、顔なじみの住民にお裾分けしたりすることもあり、地域内の関係は市場取引だけでは捉えられない。

このように、贈与と互酬の関係を含め、取引関係に基づく人間関係に加えて、もう一つ重要なのは、漁業関係者が取り組んだ荒海団とその活動である。小谷地勝さんの話によると、震災の復興に向けて、「潮通しがよく、水質がきれいな、淀みのない荒れた外海」(野田観光協会 2025)の海流に揉まれて育っているホタテのブランド化が視野に入ったところ、その「荒海ホタテ」と事業に携わる人々によって「荒海団」が設立されたという。「荒海団は2015年頃、平成26年に……1年半くらいかけて協議をして立ち上げた」と語られ、ブランド化の一環として、東京で野田村で取れたものを紹介し、また各種イベントではホタテを持参してその場で焼き、多くの人に味わってもらう活動が行われていた。荒海団には、明確なメンバーシップはなく、「ホタテに携わる人全員が荒海団……あなたたちも荒海団だ」と言われたように、「ゆるい」組織としての性格が強く、役場や漁協、魚屋なども含む大きな枠組みであると推察できる。そこから、荒海団は同じ関心を共有する人々の共同意識こそが重要な特徴だと考えられる。

このように、野田村の漁業は、単なる経済活動ではなく、家族による継承、農業との兼業、地域外からの流入を含む多様な従事形態、市場や地元商店を介した取引や交流、贈与や互酬の実践、そして荒海団による共同活動といった多層的な関わりの上に成立している。こうした網の目のような関係性は、沿岸の生業の枠を超えて、村の社会的つながり全体を支えているのである。

3.2.2 海にかかわる活動

海と浜は、漁業という産業の場であるだけでなく、遊びや行事を通じて、一層身近な存在として人々の生活と共にあった。まず、荒海団の活動の中には教育活動がある。荒海団の関係者たちは、保育園から中学校までの出前授業として磯場体験、「ワカメ給食」を行っている。特に漁師たちが自らの子どもを含む各学年の子どもたちに直接教えることで、初めて彼ら・彼女らが自分の親の仕事を知る機会になるという。高校においてもホタテやワカメの授業があり、こうした教育活動は、次世代が海に触れる機会を確保し、地域における海との関

係を維持する実践となっている。また、小谷地勝さんから、20年ほど前まで砂祭りというイベントがあり、砂像展やビーチバレーが行われ、屋台が立ち並びなど、地域の人びとにとって浜が賑わう場となっていたという聞き取りを得た。さらに12月第1週の日曜日にはホタテ祭りが開催され、地域を代表する海産物であるホタテが人々にふるまわれていたという。そして2025年は、野田港の奥で「浜開放」と呼ばれる取り組みを行い、年に一度、誰もが自由に海産物を取ることができ、村民が直接海に触れる機会となっている（デーリー東北2025）。

豊かなイベントや行事は、子ども時代の浜での遊びとともに、楽しい記憶として今回お話を伺ったみなさんの心に残っている。中川静規さんも「磯遊びなどで楽しいイメージを持っている」と述べて、海辺での遊びが子ども時代の大切な記憶となっていることを示している。以上のように、海に関わる生業が、豊かな人間関係のネットワークとイベントを支えながら、海と浜に基づく豊かな活動も生成し、日常生活に隣接する場となり、昔から地域の人々の記憶や経験に根づいていると考えられる。これは、長年にわたって形成された「海とのつながり」とも言えるのだろう。

3.3 海とのつながりの希薄化

3.3.1 地元商店の衰退と海にかかわる活動の減少

前述の3.1で示したように、震災後の海水温度の上昇・温暖化と人口減少を背景として、漁業は深刻な課題に直面し、生業に基づく人間関係や活動のつながりが弱まりつつあることも見えてくる。まず、地元での販売の衰退が見える。村の鮮魚販売店として、調査の最初に訪れようとした「お魚センター」は、2025年6月に閉店となった。また、前述のように、同じく地元の店として経営をしてきた小野ご夫妻も後継ぎ不在や震災後の商店街移転に伴う客数減少などから、長年続けてきた鮮魚販売を自分の代で閉じる決断を示しており、小林商店も、「ここ二、三年魚が少ない」、「サケは全くダメ、養殖ホタテもダメ」と語られるように近年鮮魚の仕入れが極端に難しく、店頭から鮮魚が消える場面もあり、地域の日常に欠かせなかった鮮魚供給の機能が維持困難な状況にある。

また、海辺における行事の消失も、地域のつながりの弱まりを象徴している。祭りや組織活動についても、近年は相次いで中断して消失している。荒海団は、震災復興を契機に活動を始めたものの、コロナ禍や貝毒によるホタテの出荷規

制の影響を受け、約5年間活動を停止している。ホタテ祭りも同様に、貝毒による供給難や感染症の影響で開催が見送られており、地域の交流の場が途絶えている。そして、砂像やビーチバレーで賑わった砂祭りについては、「運営者がいなくなった」ことや「砂が減った」ことが重なり、継続できずに消滅したと語られた。このように、継続的に人々を結びつけてきた祭りや組織が、感染症の流行や自然環境の変化、担い手不足などによって途絶しつつあることは、沿岸の産業衰退にとどまらず、地域社会における人間関係と活動の基盤そのものが揺らいでいることを端的に示している。

3.3.2 漁業縮退に伴う将来の不安と海離れ

こうした衰退の中で、漁業縮退の不安はさらに、次世代への継承の問題にも及んでいる。中川さんは、子どもたちが浜辺で遊ぶ機会は減り、暑さや安全面への配慮から海に近づかなくなっていると指摘した。学校でのワカメやホタテの授業も「楽しいイメージ」を伝えるにとどまっており、「(子どもたちが)漁師になって楽しいイメージだけではない現実を知った時にどうなるだろう……」と語るように、子どもたちが海との接触を深める機会は弱まりつつある。そのため、生計の不安と重なり、将来的に担い手が育たないのではないかという懸念が表れていた。このように、中川さんの語りには、自家の定置網を終わらせたいという考えに象徴される漁業の縮退見通しから、仲間と働く環境の喪失、さらに世代継承の不安へと連鎖するかたちで、今まで続いてきた海との生活の光景が曖昧になっていると言える。その曖昧さは、震災後に建設された防潮堤によって変わった景観に、より象徴的に示されている。漁協の南川雄彦さんは震災後の風景に海が視界から遮断されてしまったことを語り、中川静規さんも、防潮堤ができてから「昔より狭く感じる」「さみしい反面仕方ない」と述べ、かつて広がりを感じていた景観が変わり、海がより遠く感じられるようになったと振り返っている。こうした視覚的な変化は、単なる風景の問題にとどまらず、震災後の生業の縮退や人間関係の断絶といった過程と重なり合いながら、海そのものの心理的距離が広がっていくというニュアンスが読み取れる。

3.4 維持していることと維持したいこと

このように海との心理的な距離が広がり、人々のつながりが希薄になっている一方で、やはり維持されているもの、そして維持していきたいと願われている

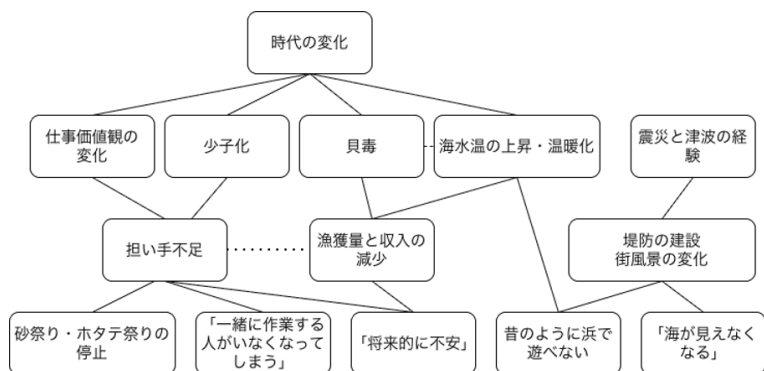


図3 海とのつながりの希薄化（筆者ら作成）

るものも浮かび上がってきた。実際に、南川雄彦さんは、「まちの風景も変わり、海も見えなくなった」と震災後の風景変化を述べながらも、「何が変わっていないか」という質問には、「海だ」と答えた。人口が減り、町の風景や人の営みが変わっても、依然として海そのものはそこにあり、人々の生活を規定し続けているという認識が示されている。夕日の下に野田港で話を伺っている時に、小谷地勝さんはその野田港と防波堤を指しながら、「こういう光景を残したい」、「変わりようがないこの海を変えないようにしたい」と述べ、海の仕事から漁港に帰ってきたときに目にする野田村の姿をこれからも残したいという思いを語った。そこには、日常の風景そのものが自分の生きる場であり続けてほしいという思いが読み取れる。また、漁協の南川雄彦さんは「野田村と言えば山よりも海だ」と述べ、海を経済基盤にとどまらず地域の象徴として捉えていることを示していた。このように、海は野田村のアイデンティティを支える存在でもあると考えられる。中川静規さんは「変わらない物は漁師の熱気」であり、「一度壊れても治す力がある」「それなりに活気を取り戻そうという気概がある村だ」と語り、地域の漁師たちが持ち続けてきた気概を大切にしていることを示していた。また、産業振興課の中野雅章さんも「漁師はすごいなと思っている」「朝早くから命がけで仕事をし、そういう人たちが村を支えている」と語り、行政の側からも漁師の存在に敬意を寄せ、その意志が重んじられていることがうかがえた。



図4 夕日の下の野田港（2025年8月著者ら撮影）

また、小谷地さんは、「野田は稚貝産地であるため、ホタテを完全にやめることはない」と強調しており、出荷工程の一部は貝毒の影響を受けずに続けられている点も重要である。また、ワカメ・ウニ・アワビ・定置網などを組み合わせ、生計を分散させることで三年間無収入でも共済によって何とか生活を維持してきたと述べている。さらに、磯場体験や学校でのワカメ・ホタテ授業、給食を通じて、子どもたちに海と関わる機会を提供する取り組みも続けられている。こうした取り組みの背後には、野田村の生計を維持したいという強い意志があり、そして何より、海への誇りが読み取れる。

以上を踏まえて、人や組織の関係が希薄になりつつあるなかでも、海と共にある生活は依然として維持され、また維持したいと強く願われていることがうかがえた。その背後には、生業を続けるための制度や工夫、次世代へと伝える

ための教育、そして何より「この海を残したい」という誇りと気概が、海とのつながりの中で息づいているのである。

4. 提案

このような考察を踏まえて、漁師の人口増加や貝毒の解決を目指すだけでなく、海と人々をつなぎ、野田村の海と人とのつながりを維持していくことが重要なのではないかという結論に至った。そこで、三点の提案、すなわち①地域イベント再生による海文化の継承、②漁師の生活を知ってもらう取り組みを通じた海の実相に関する情報発信の強化、③防潮堤をめぐる村民主体の合意形成プロセスの構築について提案する。

4.1 イベント再生

一つ目は、海に関するイベントの再生によって、子どもや若者がもっと海とつながれるようにすることである。具体的には砂祭りの再構築や、ホタテ祭りの振興を目指している。村内外の協力を得て運営ボランティアを確保することで、人手不足を解消し、海と村人がつながれる機会を増やすことが必要だと考えられる。具体的には、大阪大学大学院人間科学研究科開講の「コミュニティ・ラーニング特定演習」の授業を冬にも実施して、大学院生が参加して人手不足を補えれば、ホタテ祭りができるようになった時に、手伝いの人手不足の問題もある程度緩和できるのではないかと考えられる。また、ホタテ以外の海産物を主役にすることで、貝毒の問題に対応することも考えられる。

4.2 漁師の生活を知ってもらう活動

二つ目は、漁師の仕事の一日を小学生や若い人に知ってもらうような活動に取り組むことである。「楽しいことばかりではない」海の現実を伝えつつもその仕事のやりがいや尊さを知ってもらうことで、将来の担い手や海とのかかわり方を探るきっかけを提供する意図である。具体的には、直接漁師の仕事を見学することや、「一日漁師体験」プログラムの創設をして地元の小中学生が漁に同行できるような体験を企画する案があげられる。さらに、若手漁師やベテラン漁師、魚屋など様々な視点から野田村の漁業をありのままに記録したドキュメ

ンタリーを制作し、発信することで人々の生活と共に存在している「野田村の海」を感じられるようにしてはどうだろうか。これらの企画を通じて、野田村の海で育った人たちの意志を伝えていくことができればいいのではないかと考えられる。

4.3 防潮堤をめぐる取り組み

三つ目は、防潮堤をめぐる取り組みを村民主体で考え、海と向き合う機会をつくることである。感覚的に村民と海とを隔ててしまった防潮堤に向き合うことで、新しい海とのかかわり方を探ることが、新たな「海とのつながり」の生成に貢献するのではないかと考えられる。避難経路の確保など万全を期したうえで取り組みではあるが、村民参加型アートプロジェクトと称して、防潮堤に花を植えたり、一緒に絵を描いたり、上のスペースを活用して学びの場や交流の場にしたりすることで、村民自身が海とつながるきっかけが広がるのではないだろうか。さらに、漁業従事者だけでなく、山ぶどうのワインを作っている方々など、野田村全域の人々とも関わりを持ち、異業種交流イベントを開催することで、野田村全体が防潮堤や海と向き合う機会をつくれるのではないだろうか。例えば、防潮堤で朝日を見ながら海辺で山ぶどうワインを楽しむ会を開くことで、村全体のネットワークが強化されるのではないかと考えられる。

5. まとめ

野田村の漁業は、震災による被害や貝毒問題、漁獲量の減少、後継者不足といった深刻な課題に直面している。他方で、漁師や地域住民の語りからは、困難を受け止めつつ「海と共に生きる」という強い意志と気概が一貫して示されていた。こうした姿勢は、単に漁業の存続にとどまらず、教育活動や地域行事、互酬的な関係性を通じて、村の社会的つながりを支えてきた。今後は、この精神を次世代へと継承することが重要となってくるのではないだろうか。そのためには、漁師だけでなく村全体が海を共有し、外部との交流も取り込みながら、野田村らしい海の文化を維持・発展させていくことが重要である。そうした取り組みこそが、「海とのつながり」や「海に基づく人間関係」を未来へつなげていく道筋となるだろう。

謝辞

本報告書の作成にあたり、野田村での調査にご協力くださった多くの皆さまに、心より感謝を申し上げます。

村の水産業や地域の現状について、一つひとつの質問に真摯にお答えくださった野田村役場産業振興課の中野雅章さん、突然の訪問にもかかわらず温かく迎えてくださり、市場の様子まで見学させてくださった小林魚店の小林寛さん、あたたかいおもてなしを通して地域に根ざした商いの姿を感じさせてくださった小野商店の小野建男さんご夫妻、日常の作業のなかで丁寧にお話を聞かせてくださった漁師の仲居勉さんと中川綾人さん、漁協の仕組みや漁獲制度について具体的に説明してくださった南川雄彦さん、組合長としての経験をもとに、地元の港への思いや漁業へのまなざしを力強く語ってくださった小谷地勝さん、そして、大雨のなかでの訪問にも関わらず終始穏やかに応じてくださり、静かな誠実さが印象に残った中川静規さんに、深く御礼申し上げます。

短い滞在ではありましたが、皆さまの温かさや真摯な姿勢に触れ、野田村での学びは私たちにとってかけがえのない経験となりました。本当にありがとうございました。本報告書が、私たちが感じ取った野田村の姿をささやかに記録するものとなれば幸いです。また、本演習をコーディネートしてくださった貫牛利一さん、先生方にも感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

岩手県野田村

2023年「野田村過疎地域持続的発展計画(令和5年12月重要変更)」

https://www.vill.noda.iwate.jp/gyoseijoho/seisaku_keikaku/1081.html (2025/9/15 アクセス)

デーリー東北

2025年「ふるさと探訪 年1度の浜開放(野田村) 住民は大喜び、漁協は心境複雑」

<https://www.daily-tohoku.news/archives/299881> (2025/9/5 アクセス)

野田観光協会

2025年「岩手野田村荒海ホタテ」

<https://www.noda-kanko.com/feature/tokusanhin/araumi-hotate.html> (2025/9/5 アクセス)

野田地区地域水産業再生委員会

2025年「浜の活力再生プラン 令和4～8年度(第2期)」

https://www.jfa.aff.go.jp/j/bousai/hamaplan/sendai_area/attach/pdf/sendai_area-40.pdf (2025/9/15 アクセス)